

野山で見つけた草花と果実



△チカラシバ (秋) 隠居岳



△ゲンノショウコ (秋) 隠居岳



△ウバユリ (夏) 烏帽子岳



△コガンピ (秋) 満場越



△イヌタデ (秋) 隠居岳



△コオニユリ (夏) 烏帽子岳



△ヒガンバナ (秋) 里美町



△オトコエシ (秋) 隠居岳



△イヌビワ (夏) 隠居岳

ふるさとの森を訪ねて

まぶしい日差しを受けて輝く夏の森。さわやかな風が渡り、かれんな草花が咲く秋の野山。豊かな自然に包まれたふるさとの山々を歩いてみました。

そして、普段は気付かない自然の営みを感じるとともに、開発に伴い少しずつ失われつつある自然の成り立ちを調べ、人と自然の共生について考えてみました。



人と生態系

20世紀に入ると科学技術が急速に発展し、物質的な豊かさを求める経済活動が活発化しました。日本では特に戦後の高度経済成長期以降の急速な開発によって、森林が減少し、自然環境が変えられ、身近な生き物も次第に姿を消そうとしています。

公害や生活汚水は川や水を汚し、二酸化炭素の増加は、地球規模の温暖化をもたらしています。

生物の種類が少なくなることは、網の目のようにつながっている生態系から重要な要素が抜け落ち、人間の生活環境が損なわれていることを意味しています。

自然は、工業製品の資材、食べ物、きれいな空気や水など、さまざまな恵みを私たちに与えてくれます。特に森林は、空気をきれいにすると同時に、水の原点です。雨が少ないときも川に水を流し、大雨のときも周りを破壊しないように水を保つ働きをしています。

人もまた自然の一部です。自然を壊すことは、人が自らを壊すことです。生態系の健全性を保ちながら、つまり限りある資源を大事にし、空気や水を汚さないようにしながら、暮らしも豊かにしていくという考え方が大切です。

百年の森構想

市制施行百周年を記念して、させぼ一〇〇年委員会・一〇〇年の森構想実行委員会では、行政と市民が一緒になって、ふるさとの森づくりをしています。

一昨年初、烏帽子岳でアカガシのドングリを拾って苗づくりをしましたが、イノシシに掘り返されてしまいました。

そこで、再びドングリを拾い、名切の中央公園で苗づくりをしています。現在一万鉢ほどのドングリの苗が育てられています。苗の種類は、アカガシ、アラカシ、マテバシイ、ウラジロガシ、スタジイ、シリブカガシなどです。

これらは照葉樹で、特にアカガシは佐世保周辺の標高300メートル以上の山の潜在植生（もとも

東浜町・淀姫神社の極相林



東浜の海岸を見下ろす小高い丘の上に淀姫神社があります。神社の周りの小さな森は、本市では数少ない極相林で、クスノキなどの高木、アラカシなどの亜高木、ヤブツバキなどの低木の3層になっており、佐世保の森の原型を知る上で貴重です。写真中央付近の巨木は、落葉高木のハマセンダンです。



中央公園で育つドングリの苗

森の成り立ち

植物群落は、時間の経過とともに、別の群落に変化していくことを「遷移」といい、安定した状態を「極相」といいます。

草刈りや火入れなどによって出来た草原を放置したり、森を伐採したりすると、群落に新しい植物が侵入し始めます(遷移)。風や動物によって運ばれた種子や、以前から土の中にあつた種子、切り株などから芽が出てきます。

10年程の間に、種子から生えたアオモジなどの陽樹(落葉樹)と、切り株から萌芽した陰樹(照葉樹)が混じります。

その後、3段階で林(森)が作られていきます。(左図を参照)

① 1層の林(10年〜50年)
大きくなったシイ、カシなどの



① 1層の林 (若い林)



② 2層の林 (高い木は15m程)



③ 極相林 (高い木は20m程)

陰樹の日陰になって、陽樹の多くは枯れていきます。林の密度は高い状態です。

② 2層の林(50年〜100年)
上層には、アカガシなどの照葉樹とイヌシデなどの落葉高木が混じります。下層にはサザンカなどが出てきます。草木層(地面に近いところ)にはシダ類なども。

③ 極相林(原生林・100年以上)
3層となり、ほとんどが陰樹となります。上層にアカガシ、タブノキ、スタジイなど、中層にはサザンカ、ヤブニッケイなど、下層にはミヤマシキミ、ヒサカキなど。草木層もエビネ、カンラン、シダ類など種類が多くなり、林の中は広々として歩きやすくなります。